
Door

柵 一蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D o o r

【Nコード】

N 1 9 5 5 F

【作者名】

柵 一蔵

【あらすじ】

毎朝不思議な行動をとる彼。毎朝変わらない私。ふたりが少しずつ近づいていき、明日へと歩き出すまでのおはなし。

毎日同じ時間に同じ電車の同じ車両の同じドアから乗る。

1本見送って先頭に並び、ドアの横の隅、あのゆったりできる場所で背中を壁に預けるのが、私の決まりだ。

決まりに従って私はその日も電車に乗った。

隣の駅に着くといつも7、8人の人が乗り込んでくる。

その日もいつもと同じくらいの人々が乗り、次々と私の前を横切った。

ドアの外にはサラリーマンと思われる男性があとひとり立っていた。年齢は私と同じくらい、恐らく20代後半で、真面目だけど優しそうな人。

私はその人も当然乗るのだろうと思って少し身を引いて立ったまま、乗り込むのを待った。

しかし、私の予想はずれ、ドアが閉まった。

私から見えなくなるまで、彼は動き出す電車の方を見つめて立っていた。

どうして彼は電車に乗らなかったのだろうか。

彼の乗る駅は始発駅ではないので、見送って先頭に立っても得なこととは何もない。

次に来る電車でないと目的地に行かないのかもしれないと考え時刻表を見たが、その後の2本は私のいつもの電車と同じ行き先だった。考えているうちに5つ先の降りるべき駅に着き、私は会社まで歩くうちのそのことを忘れてしまった。

次の日、いつもの電車に乗り込み、ドアが閉まったと同時に私はふと昨日の彼を思い出した。

次の駅までの3分間、じっとドアの外のいつもと変わらない風景を眺めながら昨日の続きを考えていた。

電車がブレーキをかけゆっくりと減速し始めると、なぜか少し緊張した。

ドアが開く前に彼の姿が見えた。

そして、また彼を乗せずに電車は発車した。

その日から、乗らない彼を見ることが、いつものことになった。

私はひとりで映画を観に行くのが好きで、暇があるとき映画館へ行ってしまふ。

いつものことの始まりから確か3ヵ月後くらいの日曜日に、私は一番近い映画館へ出掛けた。

映画館に入ると人工的なひんやりとした空気が私を包み、気持ち悪さと心地良さを同時に感じ、思わず肩をすくめた。

私は上映スケジュールとにらめっこしながら、時間と興味を量りにかけて今日は何を観ようかと考えていた。

視界の端に人が来たのを感じたので、スケジュールと見つめあったまま、私は一歩右へ寄った。

その人は隣に立って腕を組み、顔を少し前に出して私と同じようににらめっこしはじめた。

なかなか決められずくたびれてきた私は、ふと、隣の人に視線を移した。

なんだか見覚えのある人であった。

すぐに誰かは思い出せなかったが、その人が「あ。」という顔をしたので、記憶を辿りながら会釈した。

その人はしばらく同じ表情のまま止まっていたが、少しして顔が緩み

「毎朝、同じ電車に乗ってますよね。」
と言った。

私はその言葉でいつもの彼だと思い出し、驚きと、話したこともない人に会釈してしまったことの照れくささで

「ああ。」

と気の抜けた返事をしてしまった。

それから、わたしたちは同じ映画を観ることになり、映画を観た後に近くの喫茶店でコーヒーを飲むことになった。

住んでいるところや仕事のこと、それと映画の話などたわいもない会話をした。

彼の穏やかな口調と少し困ったように笑う表情に、私の肩の力は抜けていった。

会話が途切れた。

彼の唇が動く気配はない。

私は彼のカップにまだ半分程度コーヒーが入っているのを確認し、カップから彼の顔へとゆっくりとゆっくりと視線を戻した。

ドアの前でのいつものことの理由が知りたかった。

彼と目が合った。

彼は目をそらさずに、いつもドアの前で見せる顔をして黙って待っていた。

しかし、私の言葉は唇まで届かずに、私は視線をカップに落とした。彼はしばらく黙っていたが優しく微笑んで、また、たわいもない話を始めた。

「じゃあ、僕は自転車で来たから。気をつけてね。」

店を出るとそう言って彼は私が歩き出すのを待った。

にこりと笑った私の顔はすぐにもとに戻り、地面を見ながら目を瞑った。

首筋に一瞬夕方の風があたったが、またすぐにじんわりと暑さを感じ、顔をあげながら私はやっと瞼を持ち上げた。

ぱちんと視線が合う。

ようやく私の言葉が唇まで届いた。

「どうして、電車に乗らないんですか？」

1・2・3・4・5秒後、彼は深呼吸をし、困ったように微笑んだ。

「いやあ、きっと気になっているだろうとは思ってたんだけど、情けない話だから。」

彼はさっきの私のように1度視線を地面に落としてから、また顔をあげて話し始めた。

「電車の事故があったでしょう。一昨年秋。その電車に大切な友達が乗っていたんだ。僕も一緒に乗っていたんだけど、僕は大丈夫だった。でも、それから、電車に乗れなくなっちゃって。乗れるようになる日が来るかと思って毎日並ぶんだ。その友達と毎日乗っていた電車に。いつもの君の電車。結局いつも自転車で行くことになるんだけどね。」

私はさっきの彼の深呼吸よりもっと深く深呼吸して、微笑んて言った。

「じゃあ、また明日。」

いつものように同じ電車に乗る私といつものように同じ電車を見送る彼は

駅で会うとお互い微笑んで会釈をするようになった。

そうやって、もう事故から2年が経とうとしている。

あの後事故について調べ、今日がその日だと知ってしまった私は、今日だけは微笑む自信がなかった。

調べなければ良かった。

それでもいつもと同じ電車の同じドアの同じ場所に乗り込んだ。

まだ、着いちゃダメ、まだ。隣の駅まで心の中で繰り返し返していた。

電車がブレーキをかけゆっくりと減速し始めると、ブレーキと反比例して心臓の鼓動が早くなっていくのがわかった。

目を瞑って電車が止まるのを待つことにした。

ドアの開いた音がした。

私はゆっくりと目を開けると、いつもと同じように人が目の前を横切り、彼の姿が現れた。

彼も笑っていない。

うつむいてじっと自分の足を見つめていた。

1度だけ私を見るとまたすぐに足を見つめ、右足を電車にかけた。

ぐつと右足に力を入れて電車に乗り込み、私と向かい合うとすぐにドアが閉まった。

彼は困ったように微笑んだ。

私も真似して困ったように微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955f/>

Door

2010年10月31日04時49分発行